

シンポジウム企画趣旨

司会 横山 博

今日の進行役をさせていただき、甲南大学の横山と申します。

こんなに沢山の方にお集まりいただきまして、驚くと同時に大変光栄に思っております。初めて参加される方も多いかと思しますので、簡単に今日のシンポジウムについてご説明しておきたいと思いません。

甲南大学では「学術フロンティア事業」というものを、この五年間行ってきております。これは、文部科学省がもと無理科系だけを対象に行っていた事業なのですが、文科系にも門戸を開こうということになりまして、甲南大学がその第一回目の指定を受けることになりました。甲南大学では「心の危機と臨床の知」ということをテーマとして、ここ五年間活動を続け、今回を含めて四回のシンポジウムを開催してきました。

最初のシンポジウムのテーマは「トラウマ(心的外傷)」でした。二回目が「現代人と母性」、これも現代の大きな問題です。三回目は「リアリティの変容」、つまりITの問題がどれだけ人間の認識に大きな影響を与えているかという問題。そ

して今日、四回目が「心理療法」です。この四回目で最後を迎えることとなります。

では、なぜ「心理療法」ということについて、簡単に述べておきたいと思えます。皆さんご存知のように、バブルが崩壊して以来、世の中は相当荒れております。そして心の危機ということが盛んに叫ばれております。しかしその心の危機に対して、われわれはどんな処方箋を持っているでしょうか。残念ながら心寒い思いをせざるを得ません。現実に学校カウンセラーはほとんどバブル的に増え続けております。それから臨床心理士になるための指定大学院の数は、甲南大学が最初指定されたときはわずか十校でしたのに、去年の段階では六一校になつております。でもこういう方々が、本当にちゃんと心理療法をすることができるといふかどうかというのを、今一度われわれは問うていく必要があるのではないかと思います。

現在広く行われている



心理療法の歴史は、決して古いものではありません。この始まりは、フロイトとユングにあるといってもよいと私は思います。この二人とも、もとは精神科医ですが、大学という研究の場所、講座の場所を捨てて実際の臨床の場の中で、フロイト理論、ユング理論を創っていきました。そしてその延長線上に現在の臨床心理学がある、といっても過言ではないと思います。したがって、われわれはあくまで「臨床の知」というものの総体系としての臨床心理学、心理臨床を考えなければならぬと考えております。

「臨床心理学」はひとつの方法論として、われわれが心理療法をやっていくうえでの参照枠となります。けれども、先ほどもしやりましたように、現在バブル的に心理療法家が増えているといっております。そのことにより、心理療法が変に技術化されて、心理療法論が単なる技術論として終わってしまう可能性があります。これは非常に危機的な状況と言わざるを得ません。心理療法とは、方法論化されるものでありながら、その一方で、絶えず一人の人間の個々の存在の問題を取り扱っていくものでもあります。ここにはどんなマニュアルもありません。個々の人生は個々の人生でもって営まれているわけです。心理療法家は、いわゆるユング理論、フロイト理論という方法論化された一つの場合と、個々の人生を取り扱うという極めて個別的なものととの狭間で揺れ動くというスタンスのなかで、初めて成り立っていくと私は考えております。

そういう意味で、われわれは絶えず心理療法とはいいたくない

何なのかということをお願い続けていかなければなりません。そして、二十一世紀に向け、新しい世界の心の状況は、何ら生まれておりません。こういう段階でわれわれがこうしたシンポジウムを持つということは、極めて意味深いことであると思っております。その意味で、今日は心理療法についてじっくりと討論されることを心から望んでおります。心理療法といっても、例えば行動科学的な認知療法のような心理療法もあります。しかしわが甲南大学では、フロイト、ユングにつながる深層心理学的な心理療法を中心として、研究活動を行ってまいりました。したがって、そういう線上に立って今日の講演者も選んでおります。

角野善宏先生は、精神科医であり、なおかつユング派の精神分析家でもあります。現在は大阪市立大学の助教授をなさっています。特に分裂病の心理療法を中心とした数々の論文著作を著しながら活躍しておられる、新進気鋭の学者であられます。その角野先生からは、「心理療法 ユング派の視点から」ということでお話しいたします。

亀井敏彦先生は、はこ心理教育研究所というところで箱庭療法を中心とした心理療法に取り組んでおられる方です。絵画や粘土など、いろいろなイメージを言葉とともに使うというかたちで心理療法をされておられます。今日は、「イメージと心理療法」というテーマで、絵画を用いた二十年以上にわたる分裂病の事例を中心にお話ししていただきます。

斧谷彌守一先生は、本学の人間科学科の教授です。今日は「静けさの響き ハイデガー／フロイト／ユング」という題

で、哲学の観点からお話しいただきます。ハイデガーの哲学は、ユングに大きな影響を与えましたが、「現存在分析」という精神医学のひとつの流派には全面的な影響を与えております。臨床からは少しはずれますが、臨床のよってたつ基盤とといったものについてのお話が聞けるのではないかと思っております。

羽下大信先生も甲南大学の人間科学科の教授です。精神分析をご専門として、臨床活動をなさっていらっしゃる方です。地域でもスクール・カウンセラー、被害者支援等、さまざまな分野において活躍になっておられます。今日は「心理療法における技法と態度 フロイトとコフート」というタイトルでお話しいただきます。

そして最後に、本学の人間科学科の教授である、中井久夫先生にお話しいただきます。いまさらご紹介するまでもありませんが、中井先生は、日本の精神療法の草分け的存在であり、また、皆さんもよくご存知の風景構成法を提案なさった方です。今日の「踏み越え(トランスグレーション)」というテーマは、先生がアフガンがアメリカ軍に侵攻されていく姿をご覧になったときに、このことは心理療法と関係があると直観的に感じにいられて、選ばれたものです。興味あるお話が聞けるのではないかと期待しております。実は中井先生はここしばらくお身体の調子がすぐれなかったのですが、それでもこのシンポジウムには是非とも参加してくださいということで、駆けつけてくださいました。皆さんを代表して、お礼を申し述べたいと思います。

また、シンポジウム開催のご挨拶をくださった吉沢英成学長には、日頃からフロンティア事業に多大なるご理解とご支援をいただいております。この場を借りて、お礼を申し上げます。

それでは皆さんも、是非ともこの討論に参加なさってください。そして、何らかのものを持って帰っていただければ幸いです。